

## 様式 C-19

### 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
研究期間：2007～2008  
課題番号：19820021  
研究課題名（和文） 昭和前期における職業作家と出版メディアの相互交渉に関する研究  
研究課題名（英文） Study on the Relation between Professional Writers and Publishing Media in the Early Showa Era  
研究代表者  
掛野 剛史（KAKENO TAKESHI）  
埼玉学園大学・人間学部・講師  
研究者番号 00453465

研究成果の概要：本研究では、昭和前期の職業作家と出版メディアを対象にして、互いにどのような自己認識を行い、如何なる相互交渉が行なわれ、どのような戦略の下で、出版メディアと職業作家がそれぞれの自己形成を図り、発展していったかという問題を明らかにした。特に横光利一や、中央公論社とその社長嶋中雄作に関して、そのメディア戦略の生成と展開について考察を深めることができた。

#### 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	0	1,200,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	360,000	2,760,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近代文学 出版 メディア 職業作家 読者

#### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、昭和前期の職業作家と出版メディアを対象にして、互いにどのような自己認識を行い、如何なる相互交渉が行なわれ、ど

のような戦略の下で、出版メディアと職業作家がそれぞれの自己形成を図り、発展していったかという問題を明らかにするものである。

実体としての作家に焦点をあてながら、消費者としての読者の獲得を企図した出版メディアが文学を如何に利用し、また、職業作家がいかなる戦略をもってそうしたメディアと対峙し、自らの作品、そして作家像を流通させたのかという問題を、個別作家作品研究の枠内だけで考察するのではなく、日本近代文学全体の普遍的な問題として明らかにすることが求められている。

特に申請者が対象とする昭和前期は、爆発的な読者獲得と、それに比例した大量出版時代の到来という出版メディアにとって大きな転換期を迎えた時期である。

昭和前期に活躍した有名作家は、職業作家として生きる選択をする中で、様々に出版社と関わりを持ったが、それは単に創作を雑誌に発表するといっただけの関与ではなく、例えば文芸春秋社の宣伝を兼ねた全国講演旅行に参加するなどといった、出版社の経済活動に深く参画するような関与の仕方も含むことになる。多様な側面を持つ昭和前期の職業作家と出版メディア相互の交渉に焦点をあて、それぞれの職業作家が、メディアと切り結ぶ地点を総体的に照らし出してみることが必要な状況があった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、昭和前期の職業作家と出版メディアを対象にして、それぞれがどのような相互の交渉の中で自己形成を図り、発展したかという問題を明らかにするというものである。

具体的には、横光利一といった作家の昭和前期の活動と、改造社、中央公論社といった出版社の出版活動の展開との相関関係を考察し、出版社のメディア展開を詳細に跡づけるとともに、そこに関わる作家の文学活動を明らかにしていく

本研究により、〈職業〉作家として様々な

経済活動に参加し、社会文化的要因に拘束される歴史的な存在としての作家の姿を明らかにすると同時に、出版メディアを単なる外的要因や環境としてのみ捉えるのではなく、職業作家との交渉によってさまざまな言説を生成、編成していく動的な存在として把握することが可能になると考えられる。そしてこのことにより、日本近代文学研究における新たな視角を提示することができるものと考えられる。

## 3. 研究の方法

雑誌メディアの誌面展開と作家との連関の問題を考察するために、「文藝春秋」や「改造」の誌面上の自己言及的な言説や、「読者」に関わる言説を渉猟した。また横光利一における「読者」認識を問題化し、そうしたメディアとの状況を考慮しながら考察した。

また、地方新聞の調査を行い、各社の宣伝講演活動などの実態調査につとめ、日本各地で行われた読者参加型の文芸講演会といったメディアイベントが、各地でどのように受け止められたかについて調査検討した。特に福島県、岩手県については現地へ赴き現地新聞の発行状況や所蔵状況を把握し、各地方の新聞と講演会との関わりや、その報道内容などについて調査した。

『日本新聞年鑑』（復刻版）や各種目録、郷土史・地方史関連図書の収集に努めた。中央公論社社長の嶋中雄作（1887～1949）について、ジャーナリストとしての軌跡を伝記的な観点から、出身校である奈良県立畝傍高校に残る同窓会資料などを調査し、不明だった事蹟の一端を明らかにした。

## 4. 研究の成果

基礎的な作業としては、横光利一の同時代文献や、出版メディアに関する言及について、デジタルデータとして入力を行い、今後

の研究の利便性を高めた他、新聞、雑誌といった出版メディア関係の書誌書目についても購入に努め、基礎的データの蓄積を図った。また『「改造」直筆原稿の研究 「改造」直筆原稿画像データベース』（雄松堂出版）を購入し、これら改造社に残された作家の原稿を、出版メディアと職業作家との連携や相克を含めた総合的な関係が顕わになる資料として考察する手がかりを得た。

全国各地で行われた出版メディアによる文芸講演会などのメディアイベントについては、特に福島県と岩手県での文芸講演会の実態について現地調査を行い、現地新聞の発行状況や所蔵状況を精査し、当該新聞と講演会との関わりや、その報道内容、現地での作家の様子、特に横光利一の足跡を詳細に跡づけ、新聞記事を収集した。岩手県の「岩手日報」では、同紙の文芸欄を中心に構成される現地の文学ネットワークの存在を確認することができた。

メディアイベントとして行われた同種の講演会についても、新聞紙面で調査、確認し、メディアイベント総体のなかで文芸講演会の位置づけを探った。

また、中央公論社社長の嶋中雄作（1887～1949）について、彼の出身校である奈良県立畝傍高校に残る資料などを調査し、これまであまり触れられなかった彼の若い時代の一面を明らかにしたほか、編集者、出版社社長として、総合雑誌や婦人雑誌メディアを牽引したそのジャーナリストとしての軌跡を論考として伝記的にまとめ、彼を中心とした中央公論社、特に昭和前期における『中央公論』『婦人公論』のメディア展開と、大衆読者との連携関係についても考察を加えた（『近代日本メディア人物誌』ミネルヴァ書房 2009年6月20日発行）。

なお、これまでに発表してきた論考のうち、特に横光利一を中心にしたものをまとめて、学位論文（「横光利一研究——近代出版メディアと読者との関わりを中心に」）を完

成させた。これは東京都立大学大学院に提出し、2009年1月23日に行われた公開審査などの手続きを経て、2009年3月に、博士（文学）の学位を授与された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

掛野剛史、見出された「読者」—昭和初頭の横光利一をめぐって、都大論究、有、44号、2007、43～55頁

〔学会発表〕 (計 0 件)

なし

〔図書〕 (計 1 件)

掛野剛史、松籟社、横光利一と関西文化圏、2008、115～136頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

掛野 剛史 (KAKENO TAKESHI)  
埼玉学園大学・人間学部・講師  
研究者番号：00453465

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし